

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	インフルエン「シー」の特徴が誤情報の伝播に及ぼす影響 ーコロナワクチン不妊説と人工地震説の事例を中心にー
キーワード	①陰謀論、②人工地震、③インフルエンシー

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	イム ドンウ Lim Dongwoo
配付時の所属先・職位等 (令和6年4月1日現在)	津田塾大学 総合政策学部 助教
現在の所属先・職位等	関西大学 社会学部 助教
プロフィール	2023 年 東京大学大学院 学際情報学府 博士課程 社会情報学コース 修了(指導教官：林香里 教授) 博士(社会情報学)取得 2023 年 ～ 2025 年 津田塾大学 総合政策学部 総合政策学科 助教 (任期あり) 2025 年 ～ 現在に至る 関西大学 社会学部 メディア専攻 助教 (任 期なし)

1. 研究の概要

本研究は、日本における人工地震に関する陰謀論を対象に、ソーシャルメディアデータを用いて調査を行った。投稿量の分析に加え、ネットワーク分析および時系列分析を実施し、地震発生に伴う活動増加の明確な時期を特定した。分析の結果、陰謀論支持者と反論者のクラスターは明確に分離しており、大規模地震の発生に応じて議論に参加するユーザー数および構造が変動することが確認された。大規模地震は両クラスターの活動を活発化させたが、陰謀論支持者は地震のない静穏期にも比較的活発に理論を拡散し続けていた。また、陰謀論支持者と反論者のクラスター間の移動は限定的で、それぞれが参照する情報源にも明確な差異が見られた。今後の分析では、情報源としての YouTube の役割を明らかにし、両クラスター間の言語使用の違いを検討することを目指す。

2. 研究の動機、目的

本研究は、インフルエンサーの影響を受ける受動的な存在と見なされがちな「インフルエンシー (influencee)」に焦点を当て、その特性に基づいて誤情報と訂正報道の伝播過程を明らかにすることを目的としている。ソーシャルメディアにおいては、マスメディアとは異なり、技術的に双方向のやり取りが可能となり、受け手が受動的な存在から積極的な存在に変化している。しかしながら、インフルエンシーの能動的な役割に関する学術的な研究は依然として十分ではない。したがって、本研究は、誤情報を信じるインフルエンシーの行動様式やその社会的文脈を明らかにし、誤情報の拡散メカニズムについて総合的な理解を深めることを目指している。

3. 研究の結果

1) 時期の分類

日本の X における人工地震関連の投稿について、時系列分析を行い、3つの重要な期間を特定した（図1）。これらは、2022年11月1日から11月30日を「Wave 1」、2023年2月1日から2月28日を「Wave 2」、2023年3月1日から3月31日を「Wave 3」とした。Wave 1は茨城県南部で発生した地震に、Wave 2はトルコの地震に反応したものと考えられ、Wave 3は特に大きな地震がなかったにもかかわらず、投稿が増加した時期である。

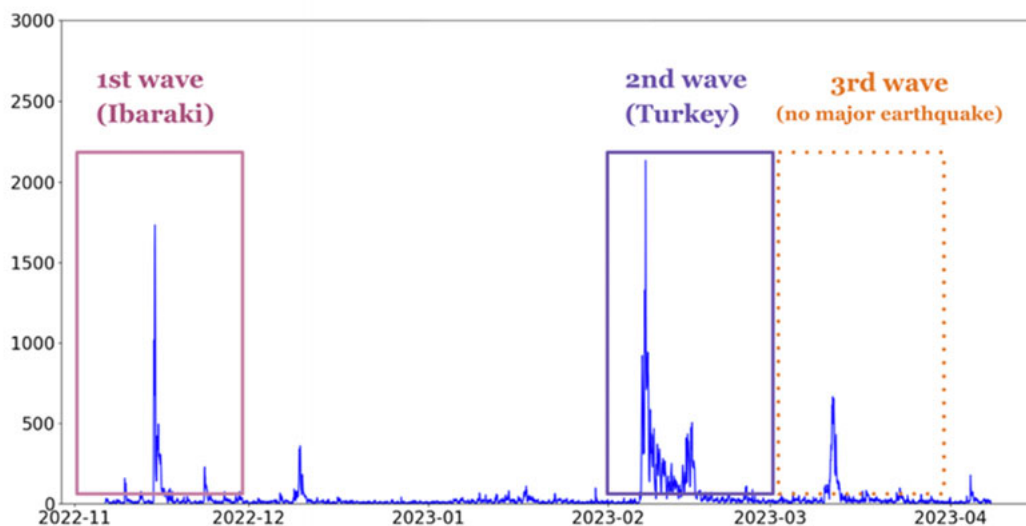


図1 投稿量の推移

2) 別れたクラスター：陰謀論者 vs 訂正論者

リポストネットワーク分析により、陰謀論者クラスターと訂正論者クラスターの間に明確な分離が確認された（図2）。また、両クラスター内で最もリポストされた投稿を調べ、クラスターごとの立場を評価した結果、陰謀論者クラスターには中規模のノードが多く、訂正論者クラスターは少数の大きなノードが目立った。これは、訂正論者クラスターの影響力が少数の著名なアカウントに集中していることを示唆している。

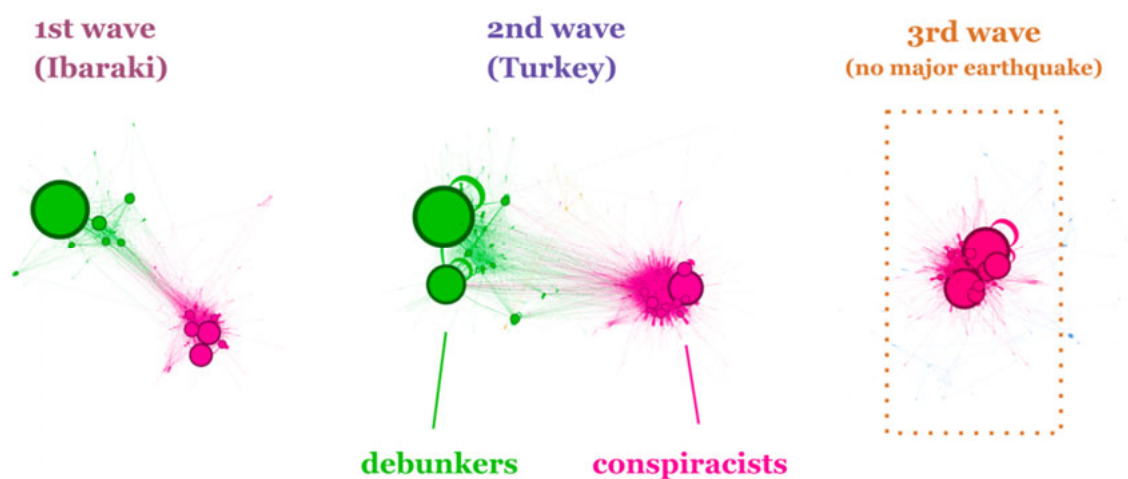


図2 各時期のリポストネットワーク（ピンク色が陰謀論者、緑色が訂正論者のクラスター）

3) 各クラスターのサイズの変化

さらに、Sankey ダイアグラムを作成し、各波の間で陰謀論者クラスターと訂正論者クラスターの規模の変化を可視化した（図3）。分析の結果、Wave 1 から Wave 2 にかけて陰謀論者クラスターは高い活動を維持し、Wave 3 ではさらに陰謀論者クラスターが顕著に活動を広げていることが分かった。

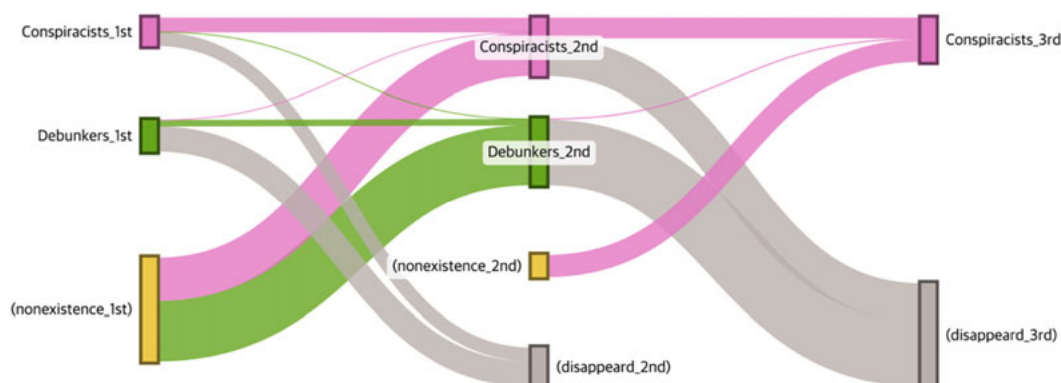


図3 Sankeyダイアグラムで分析した各時期のクラスターのサイズの変化。



図4 ワシントンで開催された ABCSS in BigData2024 で発表中の筆者

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究を進める中で、データサイエンスの手法と人文社会科学的な分析の枠組みを学際的アプローチとしてうまく活用するためには、相当な修練が必要であることを改めて実感した。同僚研究者と共に更に努力し、影響力のある国際学会で発表し、優れた論文を良いジャーナルに掲載できる研究者を目指していきたいと考えている。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

ご支援のおかげで、研究を順調に進めることができました。特に、ワシントンで開催された国際学会で発表し、そのフィードバックを基に本研究を論文化していく予定です。また、この支援金を受けることで、研究者としての自信を深めることができました。個人的には、支援金を受けた1年間で転職にも成功し、安定したポストに移ることができたため、今後はより一層研究に専念したいと考えています。この度のご支援に深く感謝申し上げます。今後もアカデミアと社会に貢献できる研究を行い、少しでも恩返しできるよう努力してまいります。